

霞

—2013年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成25年10月1日発行(通巻第25号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(25) 古写真 「中城町の山車人形と青年たち」



明治39(1906)年に祇園祭ぎおんまつりの当番町だった中城町なかじょうまちの青年たち。後列にみえるのは妖怪退治の源頼政みなもとのよりまさと猪早太いのはやたの山車人形。幕末から明治にかけて活躍した江戸の人形師古川長延ふるかわちやうえんによる作品です。

【情報ライブラリー検索キーワード「山車人形」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(25)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座、特別公開、テーマ展他】
- 秋季展示解説
- 墨書土器「千手寺」(古代)・・・2
- 青磁三階塔(中世)・・・3
- 入門姓名録(近世)・・・4
- 読み解き「土浦御祭礼之図」②(近世)・・・5
- 第十二恩物繡紙法(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「資料修復の立場から」・・・8
- コラム(25)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 会場:博物館視聴覚ホール

10月20日(日)・12月15日(日) 各日とも午後2時~(1時間30分程度)

「世界遺産を目指して」と題し、筑波山麓と霞ヶ浦周辺の遺跡についてお話しします。

★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

9月28日~10月14日(月)まで 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品をご紹介します。

★★テーマ展「城下町土浦の祭礼—江戸の文化と土浦—」★★

会期 10月26日(土)~12月8日(日)

絵画資料などをもとに、江戸時代の土浦城下で行われた祭礼をご紹介します。

○展示案内会 11月23日(土)・11月30日(土) 午後2時~

○土浦城ウォッチング —江戸時代の祭礼行列の経路をたどりながら—

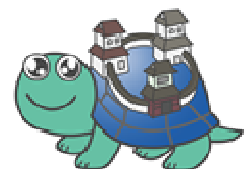
11月30日(土) 午前9時~12時 土浦城下・亀城公園ほか

(11月1日から受付開始 定員30名・先着順)

○土浦二高茶道部によるお茶会 11月30日(土) 午後1時~3時 (無料・先着50名様)

★休館日★ 月曜日(10月14日、11月4日、12月23日を除く)、10月15日(火)、11月5日(火)、11月26日(火)、12月24日(火)、12月28日(土)~2014年1月4日(土)

★無料開館★ 11月3日(日)文化の日、11月13日(水)県民の日



博物館マスコット
亀城かめくん

★スタンプカードの発行★

イベントに参加された方にスタンプカードをお渡ししています。集めたスタンプの数に応じて記念品をプレゼント!

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

墨書土器「千手寺」

—文字に残された古代の寺—

今回ご紹介する資料は、市内田村町の寺畑遺跡から出土した墨書土器です。土師器と呼ばれる素焼きの埴形土器で、底の表面に墨で文字が書かれています。こげ茶色の土器の表面に書かれた文字は読みづらい所もありますが、よく観察すると「千手寺」と読むことができます。

寺畑遺跡は、霞ヶ浦をのぞむ台地上にあります（「霞」第10号参照）。台地のほぼ中央に、間口5間（9～10m）、奥行き4間（約7m）の長方形の建物が2棟見つかっています。この建物跡は四方に庇の付く仏堂のような施設で、瓦の出土量は少なく、屋根の棟の部分にのみ瓦が使われていたと想定されます。発見された2棟には新旧があり、建て替えがなされたようですが、どちらも9世紀前半のうちに建てられたものです。9世紀後半頃まで機能し、短期間のうちに廃寺になったと考えられ、その後この地には一般の集落が営まれています。

いずれにしても、出土した墨書土器に残されていた「千手寺」の文字はこの遺跡にあった寺の名前であり、先の四方に庇の付く仏堂跡は寺の中心的な建物だったと考えられます。この他にも、僧侶が起居する僧房のような長屋風の建物跡が発見され、僧名と思われる「案豊」と書かれた墨書土器も出土しています。また、遺跡内からは鑄造に関わる銅滓（溶かした銅の残りかす）や炉の壁材が出土しており、仏具など銅製品の生産も行われていたことが想像されます。

一方、「千手寺」の寺名から、本尊として千手観音菩薩を安置していたことが想定され、先の仏堂はいわゆる観音堂だったようです。現在も、全国には千手観音を本尊とする寺院が点在しており、千手寺という寺名を伝え、奈良時代から続く由緒ある古寺もあります。我が国における観音信仰は、飛鳥・白鳳期（7世紀頃）に中国から伝来し、仏教興隆の中で奈良時代に定着しました。霞ヶ浦をのぞむこの地に、観音堂が造立されたと考えられる平安時代前期は、観音信仰が貴族を中心に盛行し、庶民へも浸透していく時代にあたります。

（塩谷 修）



寺畑遺跡出土の埴形土器（底の部分）当館所蔵



「千手寺」の墨書実測図

10/26（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 須恵器円面硯（土浦市石橋北遺跡出土）
- 粉河寺縁起絵巻（部分）写真パネル
- 瓦塔・瓦堂（土浦市根鹿北遺跡出土）



せいじさんかいとう

青磁三階塔（県指定文化財）

—寺院の威信財として—

市内高岡の法雲寺には、青磁三階塔と呼ばれる置物が宝物として伝わっています。青磁とは、灰に含まれる僅かな鉄の成分が還元して青色を呈する磁器のことで、中国浙江省にある南宋時代（12世紀～13世紀後半）の龍泉窯の作品が最も有名です。この三階塔は全体的に「釉」の緑味が強く、胎土の色が濃い赤褐色であることから、元時代末（14世紀後半）から明時代（14～17世紀）にかけての龍泉窯の作品と思われます。

青磁の置物の中には、釉をかけた部分と釉をかけずに露胎部分に鉄渋を薄く塗って、より立体感を演出した作品がみられます。遺例は少ないですが、「南宋龍泉窯青磁何仙姑像」（浙江省博物館所蔵）、「南宋青磁桶」（福建博物院所蔵）や日本でも「青磁観音菩薩及び両脇侍像」（鎌倉建長寺所蔵）、「青磁人物像」（藤沢遊行寺所蔵）が知られています。本作品の二階と三階部の龍にも、露胎部に鉄渋を塗った形跡が一部みられます。また、一・二・三階の内部には、中尊と脇侍像が配置され、金泥が施されています。

本作品は高さが38.8cmあり、華瓶類以外でこれだけ大きく手の込んだ青磁の器物は、他に類例をみません。一階部分は定かではありませんが、中尊に地藏菩薩、左右の脇侍は合掌する童子形で中央に玄武が配されています。二階部分の中尊は、観音菩薩で向かって右が合掌する童子形、左が合掌する僧形で、それぞれ善財童子と月蓋長者と思われます。この二階部分の構図は、法雲寺と縁のある鎌倉建長寺所蔵の「青磁観音菩薩及び両脇侍像」と同じ三尊形式となっています。最上階である三階部分の中尊は、釈迦如来で、両脇侍には合掌した僧形が配されています。また、この青磁三階塔全体も、三階部分の釈迦如来を中尊とし、二階部分の観音菩薩と一階部分の地藏菩薩を脇侍とする三尊形式を模した造りであると考えられます。

用途としては、室内の調度品または儀式や儀礼に用いられたと思われるのですが、はっきりしたところは分かりません。また、法雲寺第29世獅林和尚（元文5<1740>年入寂）が江戸の磯田氏から譲られたとの記録があり、江戸時代になってから入手したようです。龍泉窯の青磁は、鎌倉時代から有力武将や寺院の威信財と信望を集める威信財として、中国の各王朝との貿易により積極的に輸入されてきたものです。鎖国をしていた江戸時代においても、同様あるいはそれ以上に貴重な品であったと想像されます。法雲寺は、天正2（1574）年に佐竹勢による焼討で多くの宝物を焼失しましたが、獅林和尚が住寺した時から再び禪刹としての名声を取り戻しています。この青磁三階塔は、法雲寺中興の祖ともされる獅林和尚が寺院の威信を得るために求めたものかもしれません。（中澤達也）



青磁三階塔（法雲寺所蔵）

11/2（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（中世コーナーに展示）

- 獅林和尚像（29世）
- 三山和尚像（28世）
- 青磁花瓶



にゅうもんせいめいろく

入門姓名録

ぼくせんじゅく
—墨僊塾の子どもたち—

茂三郎（9歳）「先生はおいくつでいらっしゃいますか？」

墨僊「82歳ですよ」

大町に住んでいた金田屋茂三郎は、沼尻墨僊（1775～1856）が中城町（現中央一丁目）琴平神社のそばで営んでいた塾に安政3（1856）年1月26日に入門しました。墨僊が「大輿地球儀」を作ったことは「霞」第17号でご紹介しました。今回は塾についてお話ししましょう。

墨僊の塾天章堂の門人名簿「入門姓名録」には享和3（1803）年から安政3年まで、塾生（生徒）の姓名、入門年月日、累計番号、住所、父親の職業（屋号）、続柄、出身地、年齢が書き留められています。墨僊29歳から82歳までの半世紀の間に、女子71名を含む584名が入門しました。冒頭の会話は実際のもではありませんが、茂三郎は墨僊が没するちょうど3ヶ月前に入門した513番目の塾生です。没する直前まで入門者があったのは、息子墨潭がともに教えていたこともあるでしょうが、墨僊自身が老齢になっても健康で、優れた師匠であったことが大きな要因でしょう。

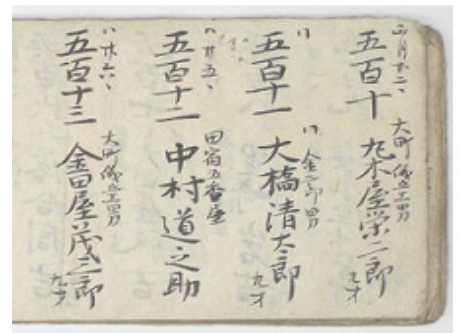
塾の名は最初「時習齋」といい、入門者を「書生」や「塾生」と呼んでいました。寺子屋や手習塾では生徒のことを筆子、寺子、筆弟と呼ぶのが普通です。「自分が営んでいるのは寺子屋ではない、その上をゆく学塾だ」という自負が墨僊にはあったようです。

授業内容やカリキュラムに関する史料は残っていませんが、初期の門人名簿「時習齋書生姓名録」と「入門姓名録」から塾の特徴を見ることができます。まず、「素読」をする塾生が9名いました。素読とは論語を声に出して読むことで、寺子屋よりレベルの高い漢学塾の教育課程です。また、「夜習」の塾生もいました。昼間は商家や武家に奉公したり、家業を手伝ったりして働く子どもたちが、夜に通ってきたのでしょう。

名簿の一部に親の職業が書かれていました。大工10人、鍛冶屋3人、以下おのおの1名ずつですが、左官、仕立屋、傘屋、油職人、馬喰（馬の仲買人）、床屋、角力らの子弟が通っており、墨僊塾は奉公人や裏店階層にまで浸透していました。

墨僊塾は、「読み書きそろばん」を教える初期教育も担っていました。入門時の年齢はもっとも多いのが7歳で、現在の小学校入学と同じです。最年少は5歳、最年長は18歳でしたが、10歳から18歳で入門する塾生が3割余を占めています。これらの塾生は手習を修了してから、より高度な学問修業を求めて入門してきました。塾生の出身地は8割強が土浦町内でしたが、残る2割は教育熱心な親の期待を背負って入門した農村の子弟で、遠方の村に住む子弟は寄宿して学んでいました。墨僊は高度な教育を求める人びとに応えることができる、ゆたかな学識をもった師匠だったのです。

（木塚久仁子）



「入門姓名録（末尾）」個人所蔵

12/7（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「時習齋書生姓名録」享和3年～文政2年4月（近世コーナーに展示）
- 「塾生米雑用控」（近世コーナーに展示）
- 特別展図録『沼尻墨僊』（2階展示ホール図書コーナーで閲覧できます）



つちうらごさいれいのず
読み解き「土浦御祭礼之図」②
—「土浦山車図譜」との比較を通して—

前号に引き続き文化9（1812）年の祇園祭を描いた「土浦御祭礼之図」（以下、御祭礼図）を取り上げます。祭礼行列の後半に登場するのは、城下町の南側を占める中城分の人々です。中城分には中城町・田宿町・裏町・西門田中、そして大町がありました。それぞれが町組の名前を書いた万度を担ぎ、趣向を凝らした出し物を用意して参加しました。

中城町の出し物は「桃太郎」でした。万度の上部には二つに割れた桃に立つ桃太郎が描かれています。また、「桃太郎の母」という役者が登場します。絵の注釈に「桃太郎母立場にて長唄しよさ（所作）仕候」とあり、長唄を披露したことが分かります。実は、江戸時代の桃太郎には桃から生まれたというストーリーとは別に、桃を食べて若返った老女が桃太郎を宿したという話もあったそうです。

御祭礼図では、小さく、かわいらしく描かれている桃太郎ですが、「土浦山車図譜」（沼尻墨僊画 以下、山車図譜）という別の絵画資料には、堂々とした桃太郎の姿が力強い筆致で描かれています。御祭礼図が行列全体の賑やかさを理解させてくれるのに対し、山車図譜は緻密な描写で出し物の細部を記録しており、町組の作り物の造形を伝える格好の資料といえます。

田宿町では「角力」が出し物でした。「田宿町 子供中」と書かれた万度につづいて、作り物の土俵を上部にのせ、柱に軍配をつけた万度が担がれています。行列を進めていく途中では子供たちが土俵入りの所作をしました。子供たちの後には、大人たちによる米俵を積んだ車と牛の万度、さらに底抜け屋台のお囃子が続きました。山車図譜には文化9年の田宿町の出し物はみられませんが、寛政5（1793）年と同8年の万度がみられます。どちらも亀に乗り箱をもった人物の姿で、「浦島太郎」の物語から取材した万度と思われる。山車図譜と御祭礼図を比べることで、寛政期と文化期の出し物に変化があったことがわかります。このことは大町についても指摘できます。山車図譜の寛政5年の万度は三宝に幣束や鈴・面を載せたものですが、文化9年の御祭礼図では「蟹気楼」の万度になっています（蟹気楼の万度については「霞」第5号を参照）。

御祭礼図と山車図譜を比較することで、土浦城下の祭礼が具体的に分かってきます。江戸時代の祭礼に関わる絵画資料が豊富に残されている土浦だからこそ、往時の祭りの様子を知ることができます。（萩谷良太）



御祭礼図（当館所蔵）



山車図譜（個人所蔵）



御祭礼図 [相撲]



山車図譜 [浦島太郎]

中城町の万度[桃太郎]

田宿町の万度

11/23（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記もあわせてご覧ください。

●テーマ展「城下町土浦の祭礼—江戸の文化と土浦—」

会期：10月26日（土）～12月8日（日）

※上記の資料は、展示替えのため 10/23～10/25 は展示を休止
します。



おんぶつぬいがみ

第十二恩物繡紙法

—土浦幼稚園児の縫取り作品—

土浦幼稚園には明治期からの教材が数多く残っています。「霞」第2号の中で、その一つである「第一恩物^{ろつきゅうほう}六球法」についてふれましたが、今回は「第十二恩物繡紙法」にあたる園児の作品をご紹介します。

恩物とは幼稚園の日本への導入とともに伝わった幼児のための教具です。ドイツの教育者で幼稚園の創設者であったフリードリッヒ・フレーベル（1782～1852）の考案で、その流れをくむ保育内容は、大正時代から昭和時代初期まで実際の保育で取り入れられていました。恩物は第一から第二十まであり、その中には幼児が作り上げてはじめて形となるものもありました。

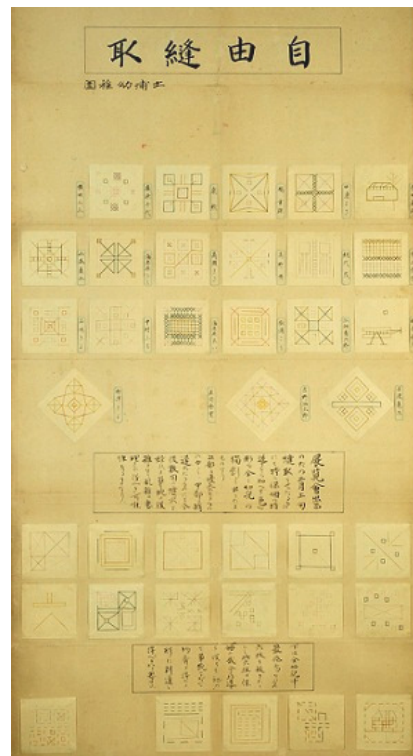
写真は「自由縫取」と題され、大正13（1924）年の卒園児の作品が40点（内3点欠失）貼られています。色糸を台紙に通して模様を形づくった「縫紙」と呼ばれるもので、第十二恩物繡紙法に相当しました。「繡紙」は、当初「しうし（しゅうし）」と音読され、のちに「ぬいがみ」、さらに「ぬいとり」とわかりやすい名称にかわっています。一辺10cm四方の用紙には等間隔の小穴があけられており、その小穴に、縦・横・斜めに糸を渡し、様々な模様が形づくられました。

恩物は段階をふんで学んでいきます。ひとつ前にあたる「第十一恩物^{さしがみ}刺紙法」は、幼児自らが針で用紙に穴をあけ、点で模様を形作ります。点が集まって形ができること、点を結び合わせると線が生まれることなどを知ります。さらに第十二恩物で、小穴（点）を自ら針を用いて糸でつなぎ、創造することを学びました。

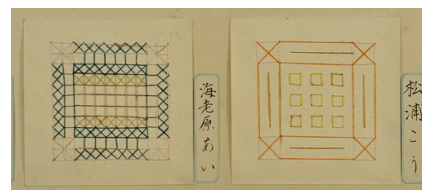
作品には氏名が添えられた優秀とされるもの、今後練習して「単純は複雑となり乱雑は整理」とされるもの、^{ほほ}保母（戦前は幼稚園教諭を「保母」と称した）の部分指導で「単純ながらも均齊を得たる形に到達」すると思われるものが分けて貼付されています。展覧会出品のために、特に保母の指導も加えず、色も形も幼児の独創であるとも記されていますが、かなり手の込んだ作品は、本当に幼児がつくったのかと疑問に思ってしまう程みごとな出来栄です。4、5歳の子供たちが針と糸を使って作品を作る光景は、現代では考えにくいものではないでしょうか。

大正13年当時の園児は114人で、保母はわずか5人でした。そのような保育環境であっても、一人一人に針を持たせ、作品を完成させています。子どもの可能性を信じ、見守る、そうした教育環境が80年以上前の土浦にあったことは、興味深いことです。

（野田礼子）



園児作品「自由縫取」
土浦市立土浦幼稚園所蔵



一部拡大

10/5（土）午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 保育室内園児写真（写真パネル）大正13年 土浦市立土浦幼稚園所蔵
- 園児作品帳（塚澤うた）昭和2年 当館所蔵
- 幼稚園手技掛図 土浦市立土浦幼稚園所蔵
（いずれも近代コーナーに展示）



市史編さんだより

—大名の出世街道—

現在市史編さん係では、来年3月に開催予定の特別展「幕末動乱期の群像」(仮)との関連から大坂城代の史料を輪読中です。幕末に大坂城代を勤めた土浦藩土屋家第10代藩主寅直は、文政3(1820)年2月24日第9代藩主土屋彦直の長男として誕生し、天保8(1837)年に従五位下に叙位・采女正に任官しました。天保9年父が眼病で隠居したため家督を継ぎ、天保14年に奏者番を拝命、寺社奉行見習から寺社奉行を経て嘉永3(1850)年9月1日大坂城代に任ぜられました。大坂城代とは、5~6万石以上の譜代大名が着任し、大坂在勤の諸役人を統率し、大坂城守護や西国諸大名の動向監督にあたる職であり、この職を経て老中に昇進する者が多かったようです。老中は将軍に直属して政務を統括する幕府の最高職でした。今回はこの奏者番→大坂城代→京都所司代→老中への昇進コースについて調べてみました。

奏者番 老中の支配で年始・五節句などで大名・旗本が将軍に謁見する際、姓名や進物の披露または将軍からの下賜物を伝達する役。譜代大名の中から選ばれた。慶長5(1600)年に初任の西尾吉次から慶応3(1867)年の松平輝照まで約267年間(一部廃止の時期あり)で428名。

大坂城代 元和5(1619)年に初任の内藤信正から慶応4年の牧野貞明まで約250年間で70名(一部重複あり)。

京都所司代 京都に在勤し朝廷・公家・寺社の監察や遠国奉行を支配し、譜代大名の中から就任。慶長5年に初任の奥平信昌から慶応3年の松平定敬まで約267年間で58名。

老中 朝廷・門跡・大名の統制や奉書加判、幕府諸役人の支配、異国御用などを扱い譜代大名の中から就任。将軍世子の住む西丸には西丸老中があり西丸の万般を統括した。文禄2(1593)年に初任の大久保忠隣から慶応4年の立花種熹まで約265年間で163名(一部重複あり)。

昇進コースに乗った大名たち

奏者番→大坂城代 46名

奏者番→大坂城代→京都所司代 22名

奏者番→大坂城代→京都所司代→老中 16名

老中職についた16名の筆頭に第2代藩主政直の名があります。政直は土浦藩領を拡大させた功労者であり、良質の刀剣や「土屋蔵帳」で有名な360点前後の茶道具を所蔵し、茶の湯の精神に基き家臣・領民への心配りを統治に活用しました。初代数直も若年寄から老中に進み、初代、2代と合わせて45年という長期間老中に在任し、土屋家の礎を築きました。

なお、この16名の中には皆さんもよくご存じの天保の改革で有名な水野忠邦をはじめ、土岐頼総・松平輝高・井上正経・久世広明・牧野貞長・牧野忠精・大久保忠真・松平康任・太田資始・松平宗堯・松平信順・土井利位・間部詮勝・内藤信親の名があります。

残念ながら寅直の名前はありますが、嘉永3年9月1日から安政5(1858)年11月26日まで8年の長きにわたり大坂城代の職を全うし、在職中の安政元年にロシアの軍艦が大坂沖に姿を見せて威圧的な態度で交渉の要求をした際、寅直が近隣の各藩に命じて警護を固めさせ、安治川河口を守るために砲台を造る等の功績がありました。幕末の動乱期でなければ寅直は老中まで上り詰め、昇進コースの17番目に名前が記載されていたのではないかと思います。老中寅直が誕生していたら、土浦の町の歴史もまた違ったものになっていたかもしれません。

(市史編さん係非常勤職員 小松崎廣子)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、当館が収蔵品の修復をお願いしている京表具泰清堂の寺門泰三さんに寄稿していただきました。

資料修復の立場から

土浦市立博物館から収蔵作品の修復依頼を受けるようになって早 18 年がたちました。その間毎年 1～2 点の作品を修復し続けてきたこととなります。修復台帳を繰って、これまで手掛けた作品を、ずらり振り返ってみますと、大きく六つに分類されることがわかります。①土浦藩主土屋家に纏わる史料 ②土浦藩砲術指南関家に纏わる史料 ③土浦藩の書家関家に纏わる史料 ④土浦藩お抱絵師岡部洞水の作品群 ⑤土浦城をはじめとした絵図面・絵地図 ⑥幼稚園教育の資料とその他です。

①土屋家の史料では、第 33 回企画展『土屋政直』にも出陳された、土屋政直筆「書簡と和歌短冊」の掛軸など。②砲術指南関家の史料では、火縄銃を構える砲術姿を表した掛軸などがあります。③書家関家の史料では、テーマ展『書の達人』などで紹介された関克明・関忠恭の墨書の掛軸など。④岡部洞水の作品群では、第 26 回特別展『岡部洞水』に出陳された「三猿図」「寿老人図」などの掛軸。⑤絵図面・絵地図では第 16 回特別展『世界図遊覧』に出陳された、六幅の掛軸からなる「坤輿万国全図」などを手がけました。⑥幼稚園教育の資料では、第 31 回特別展『幼児教育コトハジメ』展に出陳された教育用掛図の数々。

以上、これまで掛軸を主な形態として修復してきました。修復にあたっては、それぞれの作品の内容や性質を考慮し、更には後々の修復にも配慮し、今できる一番安全な手段・手法を選んでいきます。また、その時々々の展覧会や常設会場のテーマに即して作品を修復することによって、来館者の方々にもきれいになった収蔵作品をご覧いただいていると思います。

今後も、大切な地域の文化財を守っていくために、修復保存の立場から文化財伝承・活用の一助となれることを願っています。
(京表具泰清堂 寺門泰三)

コラム(25) 一資料を未来に伝える一

当館では、毎年 1～2 点ずつ資料を修復しています。どのような傷みがあるか、ぜひ展示したいものか、などを考えて修復する資料を選定しています。その際、特に考慮するのが「今手を加えるべきか」ということです。

どんなに状態が悪いものであっても、同じものは二つとありません。オリジナルは、資料の伝来を知る大事な情報も備えています。取り扱いが難しいほど傷んでいても、あえて今は手をつけないという選択肢もあります。生き物ではないため、じきによくなるというものではありませんが、収蔵庫に保管することで劣化がゆるやかになっていることを重視し、今後の保存と活用（公開）の両方を考慮した上で、今優先して修復すべき資料を選択し、修復士に託すのです。

改変することの責任を感じつつ、資料の未来を想像しながら取り組んでいます。
(野田礼子)

情報ライブラリー更新状況

【2013・10・1現在の登録数】

古写真 517点(+5)

絵葉書 424点(+5)

※()内は2013年7月2日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ)

2013年度

秋季展示室だより(通巻第25号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～6ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2013年度秋季展示は、2013年10月1日(火)～12月25日(水)となります。「霞」2013年度冬季展示室だより(通巻第26号)は2014年1月5日(日)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)